

第5期生メンバーによる活動のごく一部を紹介します!

THE CHALLENGE REPORT OF YOUTH MEMBERS

「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦



肩書き、学年は2017年10月時点のもの

2017 MEMBERS

ナガサキ・ユース代表団 第5期生メンバー



光岡 華子
(長崎大学教育学部4年)



西垣 あすか
(長崎大学医学部3年)



片山 桂維
(長崎大学教育学部3年)



山田 ゆり
(社会人)



酒井 環
(長崎純心大学比較文化学科2年)



立石 丞
(長崎県立大学
国際情報学部4年)



野村 梨紗
(長崎大学多文化社会学部2年)



北里 友佳
(長崎大学多文化社会学部3年)



福井 敦巳
(長崎大学多文化社会学部2年)



72年前の “あの日”を知る

被爆の実相をより詳しく知るため、広島へ行き、在日コリアンの方の被爆体験講話や、ボランティアの方による平和ガイド、広島平和記念資料館の見学をしました。この研修で、同じ「被爆地」でも、様々な違いがあることを知りました。学ぼうとすればいくらかでも学べることもあり、見えるものだけが全てではないと身をもって感じました。様々なことを吸収し、伝えていきたいと、今後の活動への意欲が高まりました。(山田 ゆり)

学び手から語り手へ

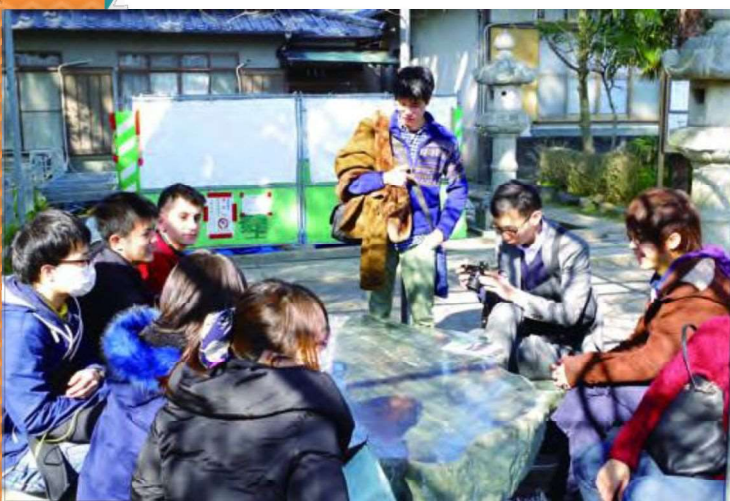
72年前、広島・長崎に原爆を投下した2機の爆撃機の両方に搭乗していたジェイコブ・ビーザーさんの孫である、アリ・ビーザーさんに語りの手法についてのワークショップを行って頂きました。長崎の街を実際に歩きながら撮った写真を通して想いを発信するという具体的な手段から、趣味や特技を活用して自分の想いを伝える方法を教わりました。それを通して私たちは、誰もがStoryteller(語り手)になれると学びました。身近な家族や友達だけではなく、多くの人への「伝え方」について考える機会となりました。(野村 梨紗)



英文テキストで学ぶ 核問題



英文テキストを用いて、NPTが作られた背景や、核兵器保有国と非核兵器保有国の間にある問題など、過去から現在の核問題に至るまであらゆることを学びました。日本語でさえ難しい内容を英語で理解するのは大変でしたが、その甲斐あって国際会議での傍聴は非常に有意義な時間となりました。また、各国政府代表団の方と一歩踏み込んだ対話をすることができました。(山田 ゆり)



歴史の目撃者になれ！

核情勢の今後を方向づける議論が目の前で繰り広げられる毎日はドキドキです！核兵器禁止条約の制定に向けた議論が進む一方、核をめぐる情勢は緊張感を増す中、各国は何を語るのか？メンバーは議論を真剣に見守ります。会場では、テレビやネットのニュースや新聞だけでは分からない核軍縮・核不拡散の最前線を学ぶことが出来ました。(福井 敦巳)



平和出前講座海外進出!! ウィーン日本人学校編

5月5日には、ウィーン日本人学校において、平和出前講座をさせていただきました。ウィーンに住む子どもたちを対象に長崎の被爆の実相や核兵器の現状を知ること、核問題は過去のことや他人事ではなく、自分たちに関係のあることであると感じたようでした。BB弾を用いて現存する核兵器の数を表す部分では、「こんなに核兵器があったら世界が滅んでしまう。」という感想や「そこにいた人たちはもっと怖かっただろう。」という主観的な感想も得ることができました。今回授業をさせて頂いて、子どもたちが平和のためにどうすればよいか本気で考える姿を見ることができ、とても有意義な時間になりました。(片山 桂維)



世界との ネットワークを築く

会議場ではたくさんの出会いがあります。メンバーはそれぞれ興味のある政府の方に直接話しかけ、質問やお話をさせていただきました。また、ドイツから会議に参加していた若者と意見交換の場も設けていただき、白熱した議論が行われました。普段、なかなか出会えない人たちと繋がるのも会議場にいるからこそです。(西垣 あすか)



想いを国連で発信！

会議期間中、政府間会議と並行して、NGO等が主催する多種多様なイベントが毎日のように行われます。ユースメンバーは、プレゼンテーションの機会を得ました。

5月10日には、ナガサキ・ユース代表団の自主ワークショップ「なぜ、若者の活動は重要か？～日本人学生と韓国人学生から～」を開催。各国から政府関係者、NGO、専門家、若者の参加がありました。主なテーマは日中韓の若者を含む市民の核問題に対する姿勢でした。事前に日中韓の大学生に原爆投下に対するアンケートを取ったところ、日本人は「多くの罪なき命が奪われた。」、中国・韓国人は「日本の侵略から解放された。」と捉えており、日中韓で認識の違いが見られました。

今回のワークショップでは、様々な分野の専門家の方から意見をいただくことができ、市民活動が核軍縮にもたらす重要性について多角的に考えるきっかけとなり、今後の活動に生かすできています。(立石丞)



平和首長会議での新たな挑戦

核兵器の廃絶を目指す平和首長会議。日本では約95%の都市が加盟し、世界中の7000以上の都市によって構成されています。4年に一度、広島長崎の平和記(祈)念式典に合わせて総会が開かれ、世界中の自治体首長が集まります。

2017年は長崎大学中部講堂が会場となりました。新たな試みとして、自治体首長と若者とのコラボレーション企画に挑戦し、担当の加盟都市に合った平和活動を提案しました。今、それらが実際に世界の都市で実践されようとしています。(北里友佳)

帰国後



Peace Caravan

ウィーンで感じたこと、学んだことを伝えたいという想いが強くなり、4期生から引き継いだ平和教育の出前授業を行うPeace Caravanをその実践の場として選びました。

5月から9月にかけて、長崎県内にとどまらず、大阪府や北海道など日本各地の16か所で1,457名に対して講演会や授業を行うことができました。昨年は高校生を主な対象としましたが、今年は小中学生や一般市民へと対象の幅が広がりました。核兵器の問題を“自分事”として捉えてもらうために、現在や未来に焦点を置き、聴覚的・視覚的な教材やディスカッションを取り入れた、ユースならではの授業を展開しました。(光岡 華子)

繋げよう！ 広げよう！ ～ユースの輪～

帰国後も様々な場所、分野でアウトプットできる活動の機会があります。インプットにとどまらず、誰かに伝える、報告することでより自分たちの学びを身に着けることができます。それぞれの団体、分野との繋がりを広げていくことも、ユースの知名度上昇や活動の幅を広げるための良い機会です。(酒井 環)

AFTER THE TRIP